

国際チームとともに行う高科大の社会実践：
「鄰家好漁」国際共好地域活動実践コンテスト

国立高雄科技大学李筱倩教授、黄愛玲副教授、謝佳琳プロジェクトサブマネージャー

2024年9月28日

毎年、大学生が楽しみに参加している「鄰家好漁—国際共好、地域活動実践コンテスト」は2024年で4年目となった。このコンテストの主な意義は、若い学生たちがジャンルを超えて地方創生の実践チームを結成し、現地調査を通じて、地域が直面する課題を探し出し、創造的で革新的な思考を通じて、地域社会と協働し、解決策や戦略をともに考えるところにある。国立高雄科技大学は、これまでの4年間、高知大学とともに国際協力型USR「鄰家好漁形成プロジェクト」を実施してきたが、今年、2024年には、新たにEUの学術組織であるIUSDRP(Inter-University Sustainable Development Research Programme)が加わり、高科大ではプロジェクトへの出資を企業に呼びかけ、実施基金を募った。青年チームによる提案が行われた後、厳しい書面審査と面接を経て、専門家の審査委員が3チームを選出し、地方創生アクションを実施した。コンテストの精神は、地方創生アクション行動にあるが、国際協力によって革新的な発想を刺激し、地域の問題を解決するとともに、今年は、台湾と日本、そして新たにインドネシアのチームもコンテストに招待することは、高科大の鄰家好漁チームの国際連携に対するコミットメントと実践を示したものである。この4年間で、この国際共好コンテストは、台湾、日本、インドネシアの教員と学生による持続可能性に対する支援とソーシャルイノベーションの実践力の連携を図っただけでなく、地域社会における発展のための潜在能力と活力を促進するとともに、学術と地域資源との結びつきを強め、参加した教員と学生のチームの国際的な視野および実践能力を強化した。

国際共好コンテストの実施は、国際的なクリエイティブな提案を募るところから始まり、今年(2024年)のコンテストでは、台湾、日本、インドネシアの3カ国から計19チームがエントリーした。学生チームの提案は審査を経て、3チームの入賞者が選出され、それぞれ企業の協賛による実践基金から10万元を獲得した。審査を担当した委員はいずれも、USR及び地域マネジメントを専門とする委員である。今年を例にみると、コンテストの一次審査を行った専門家の審査チームは、澎湖科技大学地方実践プロジェクト担当者、企業の僻地支援アクションの責任者、ドイツ・ハンブルク応用科学大学の学者で構成されている。コンテストは、国や地域を超え、リアルとオンラインを併用する方法で進められた。また、今年選出されたチームの実践基金は、すべて企業の寄付で賄われており、これらの企業は、高科大の優秀な卒業生が経営しているといった意義深いものがある。南六企業股份有限公司、源舫股份有限公司、顔光色料股份有限公司など、優秀な卒業生が経営するこうした企業は、企業の社会的責任を果たしているだけでなく、優れた手本を見せることで、高科大やその他の大学に在学する後輩たちに、地方創生に尽力する企業の努力や決意を示している。

審査の結果、2024年は日本、インドネシア、台湾からの計3チームが選出され、資金を獲得し

た。まず、高知大学の「第三セクター」だが、このチームは地元の公共交通機関との協力による特徴的なツアープログラムを提案した。これは、地元の交通ネットワークと文化資源を結び付け、地元観光産業の活性化を図る旅行プランをデザインしたもので、旅の体験を高めるだけでなく、地域経済を強化するというものだった。次にインドネシア・ジャカルタ国立大学の「ONEF Team」だが、このチームは、地域社会の環境衛生向上に関する知識の普及に重きを置き、教育と広報活動を通じて、地域住民が環境衛生の重要性をより理解できるように支援し、生活環境の改善に向けた具体的な方法の普及を図り、健康的で持続可能な地域社会の発展に貢献している。最後は台湾の高雄科技大學の「漁音童話」チームで、地元の人に地元のエピソードを語ってもらうという創造的なプランを提案した。最新の流行のポッドキャストで地元の人にインタビューを行い、地域の文化的な記憶を保存、継承するとともに、漁村へのミニトリップを通じて、地元の子どもたちとともに郷土の産業の特徴や人文景観を知り、若い世代に郷土への愛着と一体感を造成するというものだった。

国際共好コンテストの柱となる精神は、学生チームが、実地調査を通じて地域の課題を理解するとともに、クリエイティブな発想に基づくソリューションで地域の課題を解決するというものだ。このため、実践アクションは継続して行われている。そして、実践過程において、鄰家好漁プロジェクトは、学生団体に対する最良の後ろ盾としての役割を果たし、期間中はオンライン指導ワークショップ（7月と9月の1回ずつ）の開催だけでなく、学生の実施チームが専門家から一対一の最も直接的な指導を受けられるようなサポートもあった。また、LINE グループを立ち上げ、さまざまな国からコンテストに参加する学生チームが、鄰家好漁の教員からタイミングよくサポートと協力が得られるようにした。これと同時に、チーム間で相互に、より多くの交流の機会が設けられた。このようなサポートと後援は、提案に関する学生の実践力を最適化するだけでなく、学生チームがより効果的に地域のリソースにリンクし潜在力を刺激できるようにサポートし、学生チームが地元のコミュニティに入る際のハードルや遭遇し得る障害を低減させることにもつながった。2024年4月から2024年10月までの半年の実践アクションの後、鄰家好漁では大型の成果発表会を開催する。発表会では第二次審査が行われ、優れた実践を行った学生チームに賞金を贈ることになっている。この成果発表会は、本年度のUSRにおけるSIG活動に合わせたものであり、また、2024年「大学の社会的責任による持続可能な発展に対する貢献」国際シンポジウムと連携することで、実践チーム3団体の素晴らしい成果は、より多くの大学と一般の人たちに公開される。

実践アクションの最後に、3チームはそれぞれの目標、プロセス、プロジェクトで得たものを共有した。

台湾チーム:

高科大「漁音童話」チームは、地元の文化や環境保護に強い関心を持っているというところに発足の由来があります。チームのメンバーは、屏東県林辺郷の若い世代が地元の文化に対する興味を徐々に失い、また、地元の年長者の貴重なエピソードや知恵が次第に忘れられようとしていることに気づきました。そこでチームを結成し、世代を超えたコミュニケーションを通じて、林

辺の郷土のエピソードを記録・継承し、地域文化の保存と持続可能な開発目標（SDGs）の実践を促進したいと考えました。チームメンバーは、漁業技術・管理、マーケティング、航運管理、情報管理といったさまざまな学科の出身です。これらの多様な背景があることで、それぞれの視点から課題と向き合い、クリエイティブで実践的な地方創生のソリューションがデザインできました。例えば、漁業技術・管理学科のメンバーは、海洋文化に関する研究について地元の漁業者とコミュニケーションを担当し、マーケティング学科のメンバーは、ブランドディングやコンテンツ・マーケティングを得意としています。航運管理学科のメンバーは、物流や交通関連の専門的なアドバイスを行い、情報管理学科のメンバーは技術的なサポート、とりわけ、ポッドキャストの製作やデジタルプラットフォームの管理を担当しました。私たちは、創生に関するアクションを実践する過程で、異なる世代の間でどのようにコミュニケーションを図り、どのように協力するかについて学び、専門的なスキルを不断に向上させることができました。最も重要なことは、忍耐と共感について学び、徐々に地域社会との信頼関係を構築するとともに、わたしたちの取り組みが地域の文化の保存と環境保護にどのように影響を与えたかを知ることができたということです。私たちは「漁音童話」プロジェクトを通じて林辺郷の文化と環境保護に具体的に貢献し、口述歴史を保存するだけでなく、若者たちの地元に対する一体感を呼び起こし、さらには、地域社会の文化の復興と持続可能な発展を促進することができたと思っています。

日本チーム：

私たちのチームは全員自分の地元で貢献したいという思いで結成されました。メンバーの共通点は鉄道が好きということで、それを活かした観光ツアーを行いたいと考えていました。岩崎は旅行が好きで全国を回っています。鉄道を使ってよく観光しており、自分で鉄道を使ったツアーを作成してみたいという思いが強いです。金澤の地元にも鉄道が走っていて幼少期から鉄道が好きでした。しかし利用者が減少している姿を目の当たりにしておりなんとか人を呼び込みたいという思いで今回の観光ツアー作成に取り組んでいます。中川は、地元がとても田舎で人口の減少による町の衰退を顕著に感じていました。その為観光ツアーの作成によって街に活気を戻したいという思いがあります。今回の観光ツアー作成では、地域と県外の人との交流が生まれ地域に活気が生まれることを期待しています。しかし、地域の新たな観光資源を見つけることに苦労したり、大人数を受け入れることができる施設が少ないという点にも苦労しました。しかし、参加者をグループ分けして違うイベントを楽しんでもらうようにすることで課題解決を行いました。また、これまで県外のお客様が来なかったところに訪問することで町に新たな風が流れ今後の発展に繋がることのできたのではないかなと考えています。

インドネシアチーム：

インドネシアのジャカルタ国立大学の学生は、ジャカルタはインドネシアの首都でありながら、その繁栄の影には有機廃棄物や粗悪な食品の消費パターンがもたらす危険や脅威がなお存在していることに鑑み、コミュニティ教育を専攻するニルサ・イスミ・アルマンダ (Nirsa Ismi Almanda)、新しい教育のツールやプラットフォームの創造に熱心なフィオラ・マハラニ・ザミラ (Fiola Maharani Zamira)、そして、生物学の知識をもつヌルル・アシファ・ワルダナ (Nurul Assyifa Wardana) らが、ONEF 計画（有機廃棄物管理と栄養レベル、食品化学に関するプログラ

ム)を提案しました。主に、小学生や食品を小売りする露店業向けに食品の安全に関する教育を提供するというものです。そのなかには、学校に水耕栽培を導入し、学生が現代農業を実体験できるようにし、また、それと同時に、バイオ酵素生成ワークショップで地域社会のために有機廃棄物の効果的な管理ツールを提供するといった取り組みが含まれています。メンバーたちは、これらの努力が、地域の環境を改善するだけでなく、他の地域でも導入可能な一種のサステナブルな文化を創造することにもなると考えています。

学生チームの発表からわかるのは、かれらの実践アクションが地域社会に具体的な変化をもたらしただけでなく、他の地域にも参考になりうる創生モデルを提供したということだ。かれらは、イノベーション、フィールドワーク、分野横断的な協力などのアクションを通じて持続可能な発展という行為と影響を地域にもたらすには、どうすればよいかということを示した。今後、「鄰家好漁—国際共好、地域活動実践コンテスト」は持続的に規模を拡大し、より多くの世界各地の大学や専科学校、技術学院のチームを招聘して提案のコンテストに参画してもらうことにしており、国際的な感覚と地方創生の潜在力を有するプロジェクトを世界各地でさらに多く掘り起こすことを計画している。鄰家好漁では、この国際共好コンテストにおいて、コンテスト参加チームが実践を通じて学習し、専攻分野を越えた協力と問題解決能力を促進することで、地域社会といかに協力するかを学習し、より国際的な視野と責任感を有する社会のリーダーとなることをサポートする。また、それだけでなく、将来の世界の主人公となる学生たちが、地域社会と共学、共栄、共好（ともに学び、ともに繁栄し、ともに向上する）ことを推進することに尽力するよう期待している。そのためにも、私たちは、志を持つ若者たちに、この国際共好コンテストへの参加を心から呼びかけ、より多くの熱心な若者が参加し、地域社会に活力を注ぎ、それを世代から世代へと継承し共に革新に取り組み、地方の持続可能な発展のために貢献することを期待している。

地方創生のための実践的なアクションに取り組むこれら3チームによる成果発表は、以下のとおり。

- 活動名：2024 国際共好、地域活動実践コンテスト成果発表会
- 日時：2024/10/29（火） 15:30-16:30
- 場所：国立高雄科技大学楠梓キャンパス
- 主催：国立高雄科技大学、高知大学、EU「Inter-University Sustainable Development Research Programme」



国立高雄科技大学USR鄰家好漁形成プロジェクトファシリテーターで、海洋事業・産業マネジメント研究センター主任の劉文宏教授はコンテスト会場であいさつし、地方創生アクションに取り組む青年チームを激励した 写真／高科大鄰家好漁提供



コンテストでたびたび審査員をつとめている高知大学の赤池慎吾先生が初めて審査会場に出席し、学生チームに積極的にアドバイスを行った 写真/高科大鄰家好漁提供



海外の参加チームはオンラインでプレゼンテーションを行った。審査ではオンラインとオフラインで発表を聞き、質疑を行った 写真/高科大鄰家好漁提供



長栄大学のチームの学生はアフリカ出身であり、台湾、日本、インドネシア以外の4番目のナショナルチームです。写真／高科大鄰家好漁提供



国際共好コンテスト一次審査では、3チームが高い評価を受け、実践基金を獲得した 写真／高科大鄰家好漁提供



實踐基金は、業界の審査員、飛揚旅行社の黄介詩執行長から贈られ、インドネシア学生チームはオンラインで受領した 写真/高科大鄰家好漁提供



台湾学生チーム「漁音童話」は、漁村の子どもたちとともに郷土の物産について理解を深め、楽しく学習した 写真／高科大漁音童話提供



「鄰家好漁」ではオンライン指導ワークショップを実施し、コミュニティにおけるコミュニケーションスキルについて赤池慎吾先生に講義していただいた 写真／高科大鄰家好漁提供



教育活動の準備をしているインドネシアの学生チーム 写真/インドネシア ONEF チーム提供



インドネシアチームのメンバーと地域の児童たちの集合写真 写真/インドネシア ONEF チーム提供